

お供え物

令和3年2月第3週放送

お墓参りの際に、最近ほとんどの霊園やお寺でお供え物をお参りが終わったら持ち帰るよ
うに言われることが多くなりました。置いたまましていると、お供え物が傷んだり、カラスや猫
などに食い荒らされたりしてお墓が汚れてしまうからという理由です。またお供えしてもそれ
を実際にご先祖様に食べて頂ける姿が見られるわけでもないからでしょうか、お墓にお供え物
が上がる機会も少なくなってきたように思われます。

古代のインドにおいても同じような疑問を抱いた方がいたという記録が残っています。お釈
迦様亡き後、インドに侵入してきたギリシャ人のミリンダ王が僧侶のナーガセーナ長老にこん
な質問をしています・・・。

「既にこの世にいないお釈迦様が供養を受けているというのなら、お釈迦様はまだ死んでいな
い、ということになるのではないか。」

この問いはちょうどお墓にお供えしたものを先祖様が頂いてくれている姿を見られないな
らば、お供えは不要ではないのかという問いにつながりそうです。

これに対してナーガセーナ長老は大きな火の喩えで説明します・・・。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

「大きな火が燃えている時には燃料は必要ありません。しかし大きな火が完全に消えてしまった時にはそれを起す燃料と、それを起す努力が必要となるのです……。そしてそのなされた行為である供養は無効とはなりません。」

大きな火とはお釈迦様自身によって説かれた教えの事で、燃料とは私達の供養の事です。お釈迦様が既にこの世を離れ、目の前に見出されないからといってお釈迦様を偲ぶ行為である供養は、決して無駄にはならないとナーガセーナ長老は強調しているのです。

これを私達のご先祖様への供養に当てはめてみましょう。お墓やお仏壇にお線香やお花を供え、お供え物を差し上げたとしても、「ありがとう」とか「おいしかったよ」などと直接返事が返ってくるわけではありません。でもそれはナーガセーナ長老の言った燃料を用意して、大きな火を起すという行為です。そしてその行為こそが仏さまであるご先祖様という大きな火を灯すご供養の姿なのです。

では最後に、せっかく御用意頂いたお供え物をどう致しましょうか。ご先祖様は仏さまです。からきとお供え物を少しだけ召し上がって、私達にお返しになられます。そこでそれをお下がりとして有難く頂戴致しましょう。

お参りの時はご先祖様に美味しいものをご用意なさってみては如何でしょうか。お下がりに通うお供え物の味には、仏さまのかくし味も加わって更に美味しい味となるでしょう。

— 終 —